

<翻 訳>

トーマス・ムルナー：阿呆祓い (8)

名古屋初期新高ドイツ語研究会訳

(代表 精園修三)

ここに翻訳したのは 1512 年に刊行された Thomas Murner: Die Narrenbeschwörung の第 48 章から第 56 章までである (第 47 章までは『中京大学教養論叢』第 38 巻第 4 号, 第 39 巻第 2 号, 第 4 号, 第 40 巻第 2 号, 第 4 号, 第 41 巻第 2 号, 第 4 号に所載)。使用テキストは Franz Schultz 編集のムルナー全集 Thomas Murners Deutsche Schriften mit dem Holzschnitten der Erstdrucke の第 2 巻 (M. Spanier 編, Walter de Gruyter 1926 年刊) を使用し, 適宜 Josef Kürschner 編集の Deutsche National-Litteratur Historisch-kritische Ausgabe 第 17 巻第 1 分冊 (G. Balke 編, 三修社版 1973 年) を参照した。また戦前のレクラム版で, このテキストの現代語訳 (Universal-Bibliothek 2041-2043, Die Narrenbeschwörung von Thomas Murner. Erneut und erläutert von Karl Pannier. 1884 Leipzig) を参考にした。聖書に関しては『聖書新共同訳』(日本聖書協会 1987 年版) に拠った。

この翻訳は, 名古屋初期新高ドイツ語研究会が 1994 年 6 月から輪読会のテキストとして使用し, 各章をメンバーが分担して訳していたものを, 今回再度共同で検討修正したものである。但し, 解釈の一致をみない箇所についてはその章の担当者に最終判断を任せた。2001 年 4 月現在のメンバーはつぎのとおりである。青木一行 (名城大), 丑田弘忍 (中京大), 工藤康弘 (三重大), 精園修三 (中京大), 橋本忠欣 (福井大), 松尾誠之 (愛知県立大), 森昌弘 (名大名誉教授), 山田やす子 (皇学館大) (以上ア

イウエオ順)。

訳分担表

第四十八章 橋本
第四十九章 松尾
第五十 章 森
第五十一章 山田
第五十二章 青木

第五十三章 青木
第五十四章 丑田
第五十五章 工藤
第五十六章 精園

第四十八章⁽¹⁾ ロレンツ⁽²⁾が貯蔵室管理主任だ

一日で、

村中の者たちで食べるより沢山のものを、
一人で散財してしまうような者が
ロレンツを貯蔵室管理主任にしたのだ。

ロレンツさんが貯蔵室管理主任になってからというもの、

私たちは何も節約しなくなった。

真っ先にこの世からおさらばするのに

誰のために財産を節約しようというのか。

5 食事ごとに四十品は食べられるように、

如何にロレンツを貯蔵室管理主任にしたものか、

諸侯やお偉い面々は大いに気をお使いになっている。

皇帝ユリウス⁽³⁾についてもものの本にはこんなふうに書いてある。

敵を総て追い払い、

10 ローマに帰還したとき、

ドイツで何か目新しい話でもありましたかと、

ユリウスは尋ねられて、

言われたものだ。

「しかと見たぞ。蛮人どもが食卓について、

15 一日に食事は二食だったのをな。」

これを皇帝は奇妙なこととして話されたのだ。

今皇帝がお越しになって、

今私たちがもう何も残すものなどないほど

満腹になっているのを見られたら、

20 真っ先に不思議なことだと言われるだろう。

朝、軽い食事をし、

その後すぐまた何処で朝食とり、

お祈りの後のパンを食べようかと
心配する。

- 25 そうこうしてやっと食卓につき、
 肉や魚をがつつ食べ、
 クレオパトラが考え出したり、
 アハスフェロス王⁽⁴⁾がお国のために考え出したよりも、
 ずっと多くの料理を考え出した。
- 30 そしてまたすぐ夕食になって、
 またまたたらふく食べる。
 横になることはなく、
 それでいて夜食を食べても、
 豚のようにまた食らい込む。
- 35 その後も庭の石のところで
 軽い食事を待ちうける。
 暫くこんなことをしていると
 遂に夜の闇がやってくる。
 最後には寝酒を要求し、
- 40 誰が他人を酔い潰し、
 また誰が一番長く潰れないでいるかと、
 今更ながらにがぶがぶ競い飲む。
 焼き梨、甘いビスケット
 まる一週間かけて手に入れたものを
- 45 一口で全部
 見事に平らげることができるというのが、
 私たちの贅沢だ。
 百人は食べれるものを
 一日で平らげてしまうようでは、
- 50 連中は誰も金持ちにはなれず、
 何も節約せず、
 命を縮めるほかに

- 得るものはない。
- 食物を消化できなくて、
- 55 早々とこの世を去らなければならないとは
- みな不幸な人たちだ。
- だからイタリアでは私たちを
- 太ったドイツの豚野郎と呼んでいる。
- もう一度皇帝ユリウスが来られて、
- 60 私たちがみないつも腹を一杯にしているのをご覧になり、
- 喉まで料理を詰まらせているのを見られたら、いやはや
- 何と仰ることやら。
- ロレンツを貯蔵室管理主任にしたことは、
- ドイツ人の失態だ。
- 65 奴はみんなにたんまり料理を出して、
- さっさと自分の仕事を終えてしまおうてわけだ。

注

- (1) この章は、ご馳走を飽食してはひどい浪費をするドイツ人を批判している。
- (2) 「ロレンツが貯蔵室管理主任だ」というのは大酒飲みについて慣用的に使われた言い回し。ロレンツの名の元になっている聖ラウレンチウスが焼き網の上で火あぶりの刑にされたことが、強烈な渇きのイメージを呼び覚ましたのであろう。またこの聖人は火や雷雨からの守ってくれる守護聖人になり、豊かな葡萄の恵みをもたらす聖人ともなった。8月10日が祝祭日として暦にもものる聖ラウレンチウスの名はそればかりか、盛大な宴会、酒盛りをさす言葉ともなった。
- (3) ユリウス・カエサル（B.C 101 頃－B.C 44）のこと、当時ローマは共和制であったので、皇帝になるはずはなかった。
- (4) アケメネス朝ペルシャの王クセルクセス1世（B.C 486－B.C 465 在位）のこと。旧約聖書、エステル記1章には王の酒宴の様子が描かれている。

第四十九章⁽¹⁾ 草の成長する音が聞こえること⁽²⁾

世の人々は非常に学があるので

草が今成長していくのが聞こえるほどだが
それでいてしくじることが多い。

そのひどさといったら、いやはや何とも。

我々は非常に頭が良く、またしばしば抜け目がないものだから

神の御配慮にも決して満足することがない。

さて我々は数々の立派な行列を催し

周囲あまねく雨が降るようにと

5 神に祈り、ミサをとり行う。

だが神が願いをかなえてくれたとて、我々の気に入るところ
とはならぬ。

雨が降れば降ったで、太陽が出てくるようにと

我々は祈るものなのだから。

神が自らの意のままに天気を変えたとしても

10 我々の方が神よりずっとうまくできると思えば

神が天気に関してすべきことをしたことはない。

一人々々の意に沿うように

雨を降らせたり、晴にしたりするためには

神もまさしく早起きをしなければならない始末だ。

15 神という大いなる優れた理性がこんなことをしなければならないのは

阿呆組合⁽³⁾が相手だからだ。

というのはその阿呆どもたるや草が成長していくのが聞こえる程だし

神よりもずっと学があるからだ。

自分の子供を如何にして名士に仕立て上げようかと

20 大いに気を配り、神経を使う者が少なくない。

またそんなことをする権利などないのに

- 皆から搾^{しば}り取り，むしり取り
そうやって自らの魂に傷をつけ
とどのつまり魂は地獄行きとなる。
- 25 たとえ財産を貯め込んで
子供を出世させたとしても
その半分は死ぬのだし
残りは大抵阿呆だし
如何に父親が思い詰めたところで
- 30 財産を持つ能力などないのだ。
というのも連中には智恵も才覚もなく
色々心配したり，気を揉んだりしてみても無駄なこと
うまく切り抜けられようはずもなく
人に騙されるのが落ちというもの。
- 35 子供のために財産を殖^ふやす代りに
物事を理解する術^{すべ}を教えたならば
神はそういう人間のいとし子たちにも
この世で人並みの生を許されたであろうに。
しかし今や半分が死んでしまい
- 40 分別をなくしたものもあり
阿呆となったものもあり，で
阿呆修道会⁽⁴⁾ではかくのごとき体^{てい}たらく。
財産は別の家へ移っていき
樽には底などない始末。
- 45 そうして言うのだ。「誰がこんなつもりだったろうか。」
とどのつまりは自分の子供を悼むような破目になり
大きな財産で我が身に
大きな心痛をもたらすこととなる。
神はまだ現にあり
- 50 今なお日々この世を統^すべていること
それに抗^{あらが}うのは到底不可能なことを

- 予めよく知っておくべきであったのだ。
神に望みを託していたならば
自分の子供のことで喜ぶこともあっただろうに。
55 その人がいかに抜け目がなく
また自分が神の意向に満足せず
はたまた自らの知恵が神をも凌ぐと思ってみても
神の方が上手であることは変らない。
自分の死後誰が主人になるかと
60 阿呆はひどく心配し
自分の子供達に投票してくれるようにと
生きているうちに票を買いあさる。
しかし阿呆がああ世へ行くときは
我々はもはやその配慮におかまいなく
65 独自に主人を据えるのだ。
そんな仕打ちは墓の中の阿呆には辛いことにちがいない。

注

- (1) この章は、神を軽んじ、自分の能力を過信し、自分の子供を教育する代りに、度を越して子供のために富を貯めこみ、子供を物質的にしか援助しない人々に対する批判である。
(2) 非常に賢いこと。ここでは勿論皮肉な意味で使われている。
(3) 阿呆の集団をギルドになぞらえている。原文 der narren zunfft。
(4) 阿呆の集団を修道会になぞらえている。原文 im narren orden。

第五十章⁽¹⁾ ダンスに誘うこと

今ダンスをしようとする、
目指すところに走って行って、
二度とは戻って来なかった。
いつ戻ってくるか当ててくれ。

ここにいるのがすべて良い連中なら、

私はダンスに誘うのだが。

お祓いが全部終わるまでには

大きな苦勞があるのだろうか、

5 ささやかな楽しみもしてはいけないのか。

可笑しいのに、泣いたことも度々だったのだ。

音楽を演奏しろ、「さあ、踊れ」⁽²⁾ をやってくれ。

エルザちゃん、グレートちゃん⁽³⁾、先頭に立て。

きれいでない娘を後ろに下げろ。

10 まじめな娘とは踊らない。

まじめは輪舞にそぐわない。

ダンスには神父や信徒も来るが、

恥、外聞などはそっちのけ。

手のひらでもぞもぞ、むずむず、

15 隅でぶらぶら、ひそひそ話し、

親しげな挨拶のやり取り、

私の見たのは皆本当のことだが、

若者をあおる娘だけのすることで、

まじめな娘はここには来ない。

20 若者が跳び始めると、

この娘が支えて高く持ち上げる。

私の言うことが嘘か本当か分かるはず。

男たちが娘を振り回し、

グレートちゃんがそり返り、

25 何だか知らないものが見えるとなると、

礼儀も恥じらいもあったものではない。

娘をまじめにしたい者は、

ダンスには行かせるな。

「新町の羊飼い」⁽⁴⁾ は、

30 沢山娘を墮落させ、

純潔を汚してすっかり駄目にした。

普通なら奥様と呼ばれる女性が、
今では売春宿に座って、
純潔の底は抜けている。

35 ああ、羊飼いの大悪人め、
何という恥ずべき悪事をやったのだ。

ああ、羊飼いの悪い歌め、
聖なる良き日に

何度も娘たちをへとへとし、
40 神に仕えることができなくなり、
一年中お前に恋い焦がれて走り、
戸口の前の方を探すこともしない。

日曜日にもお前に仕え、
神と和解をしなかった。

45 女心は羊飼いに捕らえられ、
全く自分の神を忘れてしまった。
羊飼いはご立派な男だから、
そんな大きな奉仕を受けて当然だ。

羊飼いであらうとなかろうと、
50 子羊にはよく注意しろ。

私の心配は、時が来て、
子羊がお前から奪われ、
厳しいもてなしを受ける、
別のダンスに連れ行かれることだ。

55 そこでは、お前たちの求めているものや、
別の跳び方が教えられるだろう。

お前のダンスに楽土が欠け、
お前の子羊の毛が刈り取られ、

子羊がお前からすっかり永遠に
60 失われてしまう時に、

神はやっと娘たちを踊りに立たせる、
お前たちが踊らせようとしないで、
その礼儀正しさを軽蔑していた娘たちを。
こういう女性がこちらに来れば、
65 踊りの先頭に立って、
マリア様と素晴らしいダンスを踊るだろう。

注

- (1) この章は、ダンスをしたがる人々への批判である。
- (2) 原文 dranraran。粗野な農民の踊り。また dran=daran から、傭兵の突撃の時の叫び声も意味するので、このように訳した。
- (3) 軽薄な行動をする娘の象徴的な名前。
- (4) ダンスに合わせて歌う、当時流行した歌の一節。

第五十一章⁽¹⁾ 鉄菱^{かなびし}を袋に突っ込むこと⁽²⁾

できもしないことをやろうとし、
うまく行きっこないのに
あれこれたくさんの策略を考え出す人は、
^{かなびし}鉄菱を袋に突っ込んでいる。

さて、私もかわいそうな男で、
阿呆祓いという大仕事を
とても張り切って引き受けたが、
やって来るのは変な客ばかりで、
5 連中をみなお祓いしてやらねばならないのだ。
もし事態が逆になり、
連中が私を手中に収めて、
私をしこたま殴ったなら、
私の方につけが回ってきてしまう。
10 連中が私の髪の毛をむしり取るというのなら、

- 私も本気でやってやるぞ。
連中は幼いころから、
昼夜を問わず
神に背き、
15 一度も徳を行なったことがなく、
主なる神を愛したこともないのに、
ほかの敬虔な人たちといっしょに
天国の神のみもとへ行こうとするなんて、
たいへん不快なことではないか。
20 そんなことは起こるはずがない。
鉄菱は袋の中には入らないのだ。
革袋は実際あまりにも狭い。
天はならず者を守らず、
神の身内だけを守る。
25 さて、力づくで暴君として
統治しようとし、
みなを痛めつけ、
私たちを畏縮させ⁽³⁾、
自分たちの欲するままに強制しようとし、
30 私たちも同じ人間だなどとは
思いもしないような人々が
阿呆でないかどうか、まあ考えてみてくれ。
袋が狭すぎて、
鉄菱を押し込めないこともたびたびある。
35 それでしばしばげんこつで叩き込み、
そろって豚のように泣き叫ぶことになる。
世間の人たちは今や強制を拒む。
今では厳しさををもって事に当たるよりも、
やさしい一言を用いる方が、
40 どこででもずっと役に立つものだ。

- 力はしばしば支配者にとってやっかいなものとなる。
説教壇に上がりはしたが、
前もって準備してこなかった人、
知識を得る気はあるのだが、
45 努力せず、
知識が自分の方へ飛んでくるべきで、
自分があたかも神が聖霊をお送りになった
十二使徒の一人だとでも思っているような人。
こういうことは決してありえない。
50 まるで鉄菱を袋の中へ突っ込むようなものだ。
もし一人の女がふらふら出歩き、
軽はずみで、淫らで、
尻軽でも、
その女の阿呆の綱を解いてやる番人はいない。
55 たとえ五千年見張っていたとしても、
女は戸口の前で番人を誘い、
外出を禁じられることはない。
いったい番人は誰が見張るというのだろう。
やれやれ、神がいるだの地獄があるだのと、
60 人は言いたいことを言うが、
女が一旦墮落したら、
見張りも強制も役に立ちはしない。
女はユダヤ人の魂のように救われない。
千回射てみよ、それでも当たらない。
65 私が鉄菱を入れるには
袋はあまりにも狭すぎる。

注

- (1) この章は役に立たない仕事を批判している。
- (2) 原文は Den dryspitz in sack stossen で「不可能なことを試みようとするこ

と」の意。dryspitz「鉄菱」は盗賊，侵入者を防ぎ，または捕らえるために地上に植える鉄具で，数本のとがった先端が突き出ている。

- (3) 原文は Und uns in ein müßloch tringen で「私たちを鼠の穴に押し込んで」の意。

第五十二章⁽¹⁾ 甕や壺を砕くこと

良心の呵責などには心を閉ざし

壺をも甕をも砕く者が居る。

壺，甕すべてが壊れたら

砕けたかけらで子が遊ぶ。

かささき

鵲の巣に育ちいる雛たちは，

昨日は卵であったのに，

一つが殻を破って出てくると

もう親の姿を真似るのだ。

- 5 子供たちに対していかに生きてゆくべきか

その先例がお前に示されると良いのだが。

なぜなら子供たちの目の前で

あまた悪事を語るなら，

お前から得た悪知恵で，

- 10 子供はお前と同じように振る舞って，

お前が壺を壊したら，

その後，子らが甕を壊すことになるからだ。

お前の前で子らが賭博，飽食，贅沢しても，

もしお前がそれを許すなら，

それはまるで父が子に養子^{さいこ}を与えるようなもの，

- 15 子供はもう博打^{ばくち}を打つ気構まへだ。

子供に善い手本を見せぬなら

お前の罪はあまりにも大きくて，

その弁解をすることなど出来はせぬ。

20 なぜお前は子供らに罪惡を教えるのか。

もしもお前が地下に朽ち果てて、

やがて息子が成人したときに、

息子はお前に学び、見たり聞いたりした事を

そのとおりに実行する。

25 それゆえお前はあの世で苦痛を忍び、

息子のために罰せられねばならぬのだ。

この世で権勢を振るう者も

その実例になるが良い。

聖職者もまたおぞましくも、

30 恥ずべき見本になっている。

かの連中こそ私たちを教導し

良い手本を示すべきなのに、

強欲かつ非道な生きざままで

阿呆と同じ道を歩んでいる。

注

- (1) この章は、後の人はみな先人の行跡を真似るもので、先人が良い手本を示さなければ、後に続く人々も善い生きざまをしないものだという教訓である。鳥の雛は卵から生まれ出るとすぐ親と同じように行動するし、父親は子供の模範たるべきであり、聖職者もまた然りであるけれど、現実においては、聖職者も一般の教徒たちの模範とならず、阿呆と同じような行動を取っているという現実を嘆いている。

第五十三章⁽¹⁾ ろばに重荷を負はすこと

ただろばにのみ重荷を負わすのは

何れにもせよ酷なこと、

ろば四匹よりも多くを運ぶ

強い獣が居ようものを。

荷を運ぶ^{すべ}術を習得し

しかも一步あゆめばその早さ、
ろばの十万歩にまさる
獣がこの世に多く居る。

5 ろばはあゆみの遅々として、
欠点だらけといわれるのに、
なぜに嫌気がささぬのか
私はそれが不思議でたまらない。
まったく、その^いなな^なは惨めなうえに

10 その足取りは緩慢で、
適切かつ器用な態度が取れもせず
酢いも甘いもわかりゃあせぬ。
お前にとって危険な事態が起きたとて、
ろばは^せ急き立てられるを好まない。

15 重荷をろばに積みこめば
お前やろばが困った事になるものを、
それを何とも思わぬならば、
それを私は不思議なことに申したい。
聖職禄や奉獻品のかずかずは、

20 ただろばのみが貰っているに相違ない。
一切合財、荷物をろばに背負わせて、
良い役職をろばに遣るならば、
能ある者が^ひにく^くの嘆をかこつ事になる。
ただろばにのみ、聖職禄を与えるつもりなのか。

25 教区のすべてをろばに任せてしまうが良い、
貧乏人も神のみ旨に従って⁽²⁾、奴に任せることにしよう。
だがろばは独り立ちして歩めない。

30 教区の衆にミサ歌唄ってやれず、
ただヒイヒイと、ろばの^{わめ}声で喚くのみ。
教会の役にも立たぬろばなどに

- 聖職禄を与えては、
さきざき碌な結果になりはせぬ。
たしかに神父たちの幾人かは
ミサの歌が唄えもせず、聖書朗読もできなんだ。
35 そんな輩が説教し、またミサ歌を唄うとき、
代りの者を傭わにゃあならぬ。
ミサを立てる段になり、
ろばはどのミサにしたら良いものかと、
一文字一文字を判読し
40 三十分もページを繰っている。
ろばがどういう奴か知りたくば、
どんな風に灯明を灯しているか見るが良い。
ろばに役職を与えるのは
教徒にとって大きな害になるだろう。
45 お役を与えられぬ神父らが
ほかにも多数いるけれど、
「ろばの神父はその任に耐えぬ」など、
直言する者は居ないのだ。
ご多分に漏れず諸都市でも
50 ままペテン師を登用するが、
そ奴は忽ちお偉い様になり
人も無げなる振る舞いで
そのお役目を壟断する。
いまどきの衆は阿呆ばかり、
55 袋がずり落ちゆくのを見ても、
相も変らずろばに袋を積み上げる。
若い阿呆が支配をするとても、
雌豚の世話さえもできなからう。
こんな若造が町を支配するのも良いけれど、
60 何がどうなったのかも分かりゃあせぬ。

ろばに過重な荷を積みば、
ろばも私たちも困った事になる。

諸君、ろばを解放してやろう。

自分たちは賢いのだと気付くが良い。

65 なぜ諸君は綺麗さっぱり忘れてしまったのか、
ろばには薺^{あざみ}を食はせておけば良い。

注

- (1) この章では、能力の無い神父や修道士たちに教会や、教団内部で重要な役職を与え、そのために有為の人物が腕を揮う機会が得られぬ状態におかれている事を皮肉った章である。無能の人々をろばに喩え、重荷を負わせる無理を揶揄している。
- (2) 原文は göttlichen. Kurshner 版では götlich, K. Pannier の現代語訳では in Güte としている。Lexer の中世ドイツ語辞典では、göttlich は「神に発するところの、神の恵みある、神を懼れるところの、敬虔なる」等の意味を記載している。また、Ch. Baufeld はさらに in Gott wohlgefälliger Weise と記しているところから、ここでは Baufeld の記す意味を採用した。

第五十四章⁽¹⁾ 人の鼻をつまんで引っ張り回すこと⁽²⁾

かせいだものを、横取りし、
和解させているのに、争いを起こし、
料理している一方で、食べ尽くすなら、
つまり、それは人の鼻をつまんで引っ張り回すことだ。

私は、人の鼻をつまんで引っ張り回す連中をここへ連れてくるまで、
大いに考えねばならなかった。

この連中の親玉は、自分は
阿呆の仲間ではないと言い張った。

5 だが私は奴をここに連れてくるまでは、
たいそう甘い言葉をかけてやったものだ。
親玉は見回してから、

阿呆の側について、
私に悪態をつき始めた。

10 連中の全員がその償いをしなければならない。
連中の中にはこんな奴もいる。

年貢や税を取り立て、
それを自分の財布に入れてしまう。

ミサをあげることになれば、
15 代わりに人を雇う。

雇われた者はにミサに赴き、
七定時課⁽³⁾を勤める。

この者に何が与えられるのか、おわかりか。
たったのクロイツェル貨幣⁽⁴⁾一枚、靴一足、

20 それに加えて十二本の紐。
だが雇い主の司祭は教会の財産を手に入れて、
全く仕事をしない。
でも聖職者を任命することができ、

その際人の鼻をつまんで引っ張り回すことを心得ている。
25 こうして任じられる代理の司祭を、
私は馬同然とみなしてきた。

日夜田畑を耕しても、
麦わら以外に何ももらえないのだ。

司祭は内陣からうまく逃げ出すが、
30 代理の司祭は犁^{すき}を引き、

司祭の代わりに歌い、祈り、
至る所で代理を務めねばならない、
但し食卓とベッドと、
それに楽しいことは除かれる。

35 私が代わりにすべてを司ることになれば、
私は料理女と
七定時課を勤め、夜のミサをあげたい、

- たとえ頼まれなかったとしてもだ。
貧困のために代理の司祭の幾人かは嘘をつき、
40 日々の糧を我々からだまし取る。
それでもそんな奴らのことを私は悪く思わない、
 貧乏司祭が聖職禄を求めてどんなに走り回っても、
金持でけちな司祭どもが、
 すでにローマで買い取ってしまったのだから。
45 奴らは聖職禄と教会財産を手に入れるが、
 もはやミサはあげずに、
貧乏司祭に代わりを務めさせる。
 この者はやむを得ず百姓たちから取り立てねばならない。
貧乏司祭は、
50 麦わらをもらっただけで喜び、
辛抱強く鼻を差し出すと、
 鼻をつまんで引っ張り回されて、
ついに自分も阿呆の仲間入りをする。
 お前たちが同類であろうと、なかろうと、
55 鼻がであろうと、なかろうと
 私はお前たちの鼻とは関係がない。
羊飼いが自分の羊を閉じこめた。
 それが狼を怒らせた。
狼は言った。「哀れな羊を外へ出せ、
60 羊のためだ。私を恐れるな。
お前が哀れな羊を閉じこめたので、
 私は羊にたいそう同情している。
羊のことを思っ言うが、
 長く閉じこめられれば、死んでしまう。」
65 羊飼いは言った。「いや、私はお前をよく知っている。
 お前はしょっちゅう人の鼻をつまんで引っ張り回している。」

注

- (1) この章は、人の成果を横取りすることに対する批判である。
- (2) 原文は、by der nasen fieren 古くからの諺で、「人をたぶらかす」の意。
- (3) 教会が司祭、修道者に命じた毎日の勤め、即ち朝課、一時課、三時課、六時課、九時課、晩課、終課の七時課。
- (4) 13－19 世紀の小額貨幣。

第五十五章⁽¹⁾ いかさまをすること⁽²⁾

お偉方に奉公しようとするなら、
用心しろ。ぽかんと見とれるのはやめろ。
やつらはいかさまが上手で、
全然支払わないのに、支払いの約束はたくさんする。

- もし私が秘密をばらそうとすれば
打ちべらで打たれるだろう！
よし、私は決めたぞ、
犬に追い立てられてもかまうもんか！
- 5 それから私が追い出されるはめになったら
くさい臭いをぶっ放して
お偉方たちの鼻をまげてやる。
たとえやつらが健康でも病気になるに違いない。
お偉方たちに奉公する者は
- 10 簡単に驚いてあっけにとられ、
鈴をつけられ⁽³⁾、
それを一生身につけていなければならない。
たとえ空が晴れていて、
お偉方が笑いたい気分になっていても、
- 15 この二つのものはいとも簡単に
たちまち変わってしまう。
だからその二つを信じるな、

- それよりも自分の心配をしろ。
お偉方たちの不誠実はあまりに多く、
20 連中はその不誠実を帽子のゲーム⁽⁴⁾と呼んでいる。
ああ、このゲームを最初に思いついたやつは、
胡椒の国にでも行ってくれたらいいのに！⁽⁵⁾
世の中では武装した傭兵を雇う必要がある、
自分の仕事をしっかり果たし、
25 報酬に値する傭兵を。
ところが報酬を支払う段になると、
皆殺しに遭うようなところへ
派遣される。
お偉方からの報酬とはそういうものだから、
30 逃げられるように用心しろ。
お偉方たちがこんなやり方で私たちに支払おうとするなら、
その報酬で悪魔がやつらに仕えるがいい！
傭兵たちが打ち殺されずに
再び故郷へ帰してもらったときは、
35 誰もががある場所へ行くように指示される、
その場所で傭兵たちは賃金がもらえと思い込む。
確かだろうと傭兵が思った瞬間、
それは真っ赤なうそなのだ。
そこで傭兵はお偉方のところへ戻り、
40 お偉方にその念書、
印章の付された証書、あらゆる保証を求めようとする。
しかしそこには事前のたくらみがあった。
傭兵は念書を見せるが、
0の字がきたなく書かれていて、
45 下の方に長く伸びている⁽⁶⁾、
かくして傭兵は完全にたばかられたのだ。
すると傭兵はさんざんののしって

- お偉方が同意した文書を見せるが、
両者とも共有している
- 50 合意事項には気づかない。
傭兵はそれをお偉方の意志だと思っているが、
実際はペテンなのだ。
自分の仕事を始め、
まじめに働き、誠実であれ。
- 55 私はこのことを心からお前に勧める。
お偉方への奉公で多くの人が後悔してきた。
自立できる人は
お偉方へ奉公などしてはならぬ。
お前が戦で倒れていく一方で、
- 60 お偉方たちは戦の処理を心得ている。
お前が戦で露と消えていくのに、
お偉方たちは和睦のむすび方を心得ている。
ダビデ王が人妻のバト・シェバに
卑劣にも横恋慕したとき、
- 65 合法的に彼女を自分のものにするために、
同じような策略を用いた⁽⁷⁾。
そしてバト・シェバの夫ウリヤを
生きて帰れない場所へ派遣した。
これがダビデがウリヤへ支払った報酬だ。
- 70 誰もがそんな支払い方をするのなら、
むしろ私に対して未払い賃金はまったくないと
誓ってくれた方がまだましだ。
今や報酬と言えばそういうものであるのが実情だ。
というのも多くのお偉方たちがそれをやってきたから。
- 75 だからもしお前が賢い傭兵なら
しっかり自分自身に仕えろ。

注

- (1) この章はお偉方がいかさまをして人をだますことへの批判である。
- (2) 原文 Vnter dem hietlin spilen 「帽子の下で演じる」は帽子を使った手品になぞらえたもので、「いかさまをして人をだます」の意味。
- (3) 鈴は阿呆の象徴である。
- (4) いかさまという意味。
- (5) 遠いところへ行ってしまうという意味。
- (6) 0 が 9 に見えるようにいかさまを行なった。
- (7) 旧約聖書サムエル記下 11 参照。

第五十六章 ^{はがね}(1) 鋼の山をも貫く嘘をつくこと ⁽²⁾

あの連中の正体が明らかになるのは、
 ^{はり}家の梁が折れるほどの嘘がつかれる時だ。
 連中は今や、たとえ山が六つ並んでいても、
 ^{はがね}鋼の山をも貫く嘘をつく。

これはしたり、前代未聞のことだ。
 あの客人たちはどこから来たのか、
 たとえ山が六つ並んでいても、
 その山をも貫くような嘘が言えるあの客人たちは。

5 家の梁が折れるほどの嘘がつかれれば、
 それは真っ赤な嘘、^{おおごと}大事だ。
 我々だって以前、エチオピアに行くまで気づかれないような
 嘘をつくことができたし、

厚さ四十四エレ ⁽³⁾ の板を貫き、
 10 二十マイルのかなたまで悪臭を放つ
 嘘をついたこともある。

 あれが嘘でなければ、私は酔っていて、
 嘘というものを全然知らないことになる。
 ところがお前たちは、

- 15 その我々をたぶらかし、
 はるかに上手に嘘をつくことができる人たちだ。
 だからこちらへ座れ、席を譲ろう。
 お前たちの嘘は罪が重いが、
 我々の嘘は罪が軽い、
- 20 だからまずお前たちの嘘から始めよう。
 嘘つきの一番手はカイロから
 海を渡ってテリアカ⁽⁴⁾を運んでくる、
 エチオピアからは猿の脂身から取った軟膏を運んでくる。
 奴は市場で店をひらき、
- 25 その秘術なるものが布に絵で説明してある。
 奴はテリアカを皆に試しに使わせるが、
 この悪党が姿を消すと、
 それは甘草の根を煮詰めたものにほかならない。
 奴は蛇を持ってきている、
- 30 それはたたいて眼をつぶし、動かぬようにしてある、
 その蛇を台の上に置き、
 自分のまわりに人垣をつくる。——
- 世間の人々が私ほどに頭がよければ、
 テリアカを返品するよう教えてやるのに、
- 35 するとあの悪党は逃げ出さざるをえない。——
 奴が側に置いている軟膏には
 絶大な効能があるから、
 万病を癒す。
 奴は軟膏を売り切ると、
- 40 すばやく姿を消す。
 奴は嘘つきの実演をして見せたのだ。——
 嘘つきの二番手は毎年やって来て、
 説教壇の司祭の前で
 ひざまずき、

- 45 毎年熱っぽく
涙をためて約束する言葉が、
 自分は心を罪から清め、
罪のない体でまいります、だ。
 ところがその全てが嘘っぱち。
- 50 奴はまた同時に自分の罪を告白するが、
 神様にびた一文差し出すわけでもない。
しかし、このままで終わるわけがない、
 神様は帳簿をつけておられる。
私はこうした清算してない罪が
- 55 いつか必ずすっかり清算されなければならないと思う。
神様は計算間違いをなさらないから、
 利息をつけて、と仰るだろう。
嘘つきはひざまずき、
 大いに後悔しております、と言う。
- 60 しかし司祭のもとを離れるやいなや、
 以前やっていたことをやる。⁽⁵⁾
私が一千年間罪を犯すなと言いつけても、
 それをやめようとしな。――
- 嘘つきのなかには自分の嘘にお墨付きをもらう奴も居て、
- 65 街頭に座って大声で言う、
自分は水腫症にかかっている、
 丹毒の炎症が足に出ている、
天罰で癲癇、^{てんかん} 舞踏病に
 かかっているのでここを動けない、
- 70 そう言って、まるで猪のように口から泡をふく、――
 事前に石鹼を口に入れておいたのだ。
馬鹿々々しいったらない。⁽⁶⁾
 ああ、神よ、もし悪党どもがすべて溺死させられ、
車刑台で片端にされるならば、

- 75 これほど望ましいことはなかろう。
まことに嘆かわしいことだが、
足の不自由を装って物乞いしている
あのならず者の償いをするのは、
まっとうで、正直な貧乏人だ。
- 80 悪党はあまたの策をろうするので、
誰が貧乏で、誰が嘘をついているのか、
誰が何を必要としているか、誰にもわからない。——
嘘をもくろんでいる奴はほかにも数知れない。
浮気女どもはすべて嘘を熟知している。——
- 85 私の言うことに偽りはない。——
ああ、こんな嘘には雷が落ちて消え去るがいい。
色事での一番うまい手は、
上手に嘘をつくことだ。
職人も上手に嘘をついて、
- 90 私から日々の糧をだまし取るのだ。
たとえ奴らが一千回請け合おうとも、
私の願いが叶えられることはない。
嘘つきからは罰金を貰うことにしたら、
私は言うことなしだ。
- 95 嘘をすべて書くなら、
国中のインクが無くなるだろう。
お前が嘘つきを数えようとしたら、
決して数えおわることはない。

(受理日 平成 13 年 7 月 11 日)

注

- (1) この章は嘘つき、詐欺師に対する批判である。
- (2) 原文は *liegen durch ein stehelin berg* で、鋼のように堅い山を貫くような嘘、大嘘をつくこと。

- (3) 昔の尺度で、一エレは 60－80cm。
- (4) 中世の解毒剤。
- (5) テキストでは、60, 61 行は 58 行の前にあるが、意味を取って現行のような順に並べかえて訳した。
- (6) 原文は *Das im die seiff der tüfel gseg!* で、直訳は「悪魔がその石鹼を祝福せんことを」である。